

来月に控えた、友人主催のパーティー。普段の自分じゃ絶対に縁がないような、少し背伸びした集まりに誘われてしまった僕は、場違いにならないための服を探しに来ていた。

けれど、店内に一步足を踏み入れた瞬間に「あ、これ無理だ」と悟った。

(……ば、場違いすぎる。周りの客も店員も、みんな雑誌から飛び出してきたみたいに完璧。僕みたいな、地味な人間が飛び込んでもいい場所じゃなかったんだ……)

居たたまれなくなっていて、バッグの持ち手を指が白くなるほど握りしめた。踵を返して逃げ出そうとしたその時、背後から声をかけられた。

「ねえ、君さ。今日は何探しに来たの？」

振り返ると、そこには驚くほど整った顔立ちの男が立っていた。スッと通った高い鼻筋に、鋭いライ

ンを描く切れ長の瞳。長く濃い睫毛の影が落とされたその涼しげな目元は、どこか猫を彷彿とさせる。

友人が持っていた雑誌で見たことのある、カリスマ店員の虹也（こうや）さんだった。

（……本物だ。本物の……）

「あ、えっと……何かあればと思ったんですけど。僕には、まだ早かったみたいで……」

「今日来た日がタイミングでしょ」

虹也さんは不敵な笑みを浮かべると、僕のパーソナルスペースを軽々と踏み越えてきた。ホワイトムスクの香りが鼻腔をくすぐり、それだけで頭がぼーっとする。

「君、名前は？」

「と、時央（ときお）です、けど……」

「いい名前。何が欲しい？ 俺が君に最高の服を見つけてあげる」

「……ええと、シャツが一枚欲しいなって、思っていて……」

「なら、ぴったりのを見つけるよ」

虹也さんは僕の身体を、足の先から頭のとっぺんまで、服の上から愛撫するようにじっくりと眺めた。その視線が、僕の下腹部に一瞬留まった気がして、背筋に嫌な汗が流れる。

数秒後、彼は迷いのない足取りで一着のシャツを手を取った。

「時央くんの雰囲気には、あえてこの攻めたデザインがいいね。……どう？ 似合うと思うよ」

差し出されたのは、深いミッドナイトブルーのシースルーシャツ。最高級のシルクが放つ光沢が、店内の照明を反射して美しく揺れている。

「き、綺麗……っ」

思わず、感嘆の声が漏れた。男性用なのに、どこか中性的で、退廃的な色香が漂っている。

(……すごい。自分じゃ絶対に選ばないデザインだ……)

「計算されたカッティングと、この透け感。これが、時央くんの隠れた魅力を引き立ててくれるんだよ」

虹也さんに促されて背面を見ると、シャツの背中は大きく開いた大胆なデザインだった。僕はそれを見て、驚いて言った。

「こ、これはちょっと、露出が多すぎます！」

「だからこそ、君の白い肌には合うよ」

「いや、でもあの、僕にはちょっと、似合わないかも……」

「まだ着てないじゃん。ひとまずは俺を信じて、着てよ。絶対似合うから」

迷いのない、確信に満ちた声。その瞳に見つめら

れると、彼が言うことが唯一の正解であるかのように思えてくる。

「試着室へ案内するよ。ほら、こっちおいで」

「は、はい……」

虹也さんは満足げに微笑むと、淀みのない動作で僕をエスコートし始めた。彼の大きな手が、僕の腰にそっと添えられる。薄いシャツ越しに伝わる体温に、僕は吸い寄せられるように、厚いカーテンで仕切られた密室へと足を踏み入れた。

「着替え終わったらすぐに呼んで。外で待ってるからさ」

「は、はい……」

カーテンが引かれ、僕は鏡張りの密室に一人取り残された。

（うう……。これは絶対一度は着ないといけないや

つだ……)

意を決して、着ていた服を脱ぎ、シースルーのシャツに袖を通した。シャツそのものは、ため息が出るほど美しい。けれど、問題があった。

「……あれ？」

(大きい。……ってというか、シャツ全体が大きすぎて布が余ってる……。胸が見えそう)

鏡に映る僕は、サイズが合わないせいで生地が余り、僕が隠しているカントボーイの特徴の一つである膨らんだ胸が見えそうだった。

(こんなの無理。でも、よかったかも……。これなら、諦める理由ができる。やっぱり僕には……)

「あの……虹也さん。……すみません」

カーテンの向こう側に届くよう、震える声で呼びかける。

「あの、サイズが、全然合わなくて。うまく、着られそうにないです。それに、このデザインは、」

「あれ、サイズ合わなかった？ ちょっと待って、確認させてよ」

「えっ！？ あ、待って……っ！」

止める間もなかった。厚いカーテンがわずかに開き、虹也さんの長身が、狭い試着室の空間へと滑り込んでくる。一気に、彼の纏うホワイトムスクの香りと、高い体温がこの密室を支配した。

(……わ、入ってきた……っ！ 胸……見えてないよね？ でも、このシャツ、ただでさえ透けてるのに……)

僕は反射的に身を縮め、胸元の生地をぎゅっと抱え込む。虹也さんは、そんな僕の動揺を愉しむように薄く笑い、鏡越しに僕をじっと見つめた。

「……あー、確かに生地が余ってるな。シルエット

が崩れてる。でも似合ってるじゃん」

「い、いえ……あの、やっぱり僕には……」

「正しいサイズのシャツを持ってくるよ。その前に、正確な数値、測らせて。ぴったりのを用意したいからさ♡」

（え……？ サイズを、測る……？）

虹也さんは、どこから取り出したのか、滑らかなメジャーを手に、僕に一步近づいた。逃げ場のない距離。

「で、でも……っ」

「大丈夫、すぐ終わるから。……じゃ、少し腕を上げて」

ひやり、と冷たいメジャーが、僕の剥き出しの背中に回された。滑らかな感触が、敏感な肌をなぞっていく。

「んっ……！」



「……まずは、アンダーから」

カチリ、とメジャーが固定される音。その時、虹也さんの指先が、わざとらしく僕のおっぱいの膨らみの下を、すすっと撫で上げた。

「ひゃっ……！？♡」

「ごめん、手が滑った。にしても、君。カントボーイだったんだ」

「あ、ええと、まあ……」

鏡越しに目が合う。僕は言われた通り、男性でありながら女性器を持つカントボーイだ。正直、コンプレックスだから、バレたくはなかったのだけれど。

「俺、カントボーイのお客さんも何人か担当してるから、安心してよ」

虹也さんはうっすらと、すべてを見透かすような瞳で笑っていた。心臓が、ドクン、ドクンと壊れた

ように跳ねる。

「……次はトップ。でもそのインナーは、少し外さしてね。結構生地が厚いからさ」

「えっ、あ、待って……っ！」

「大丈夫、確認するだけだから♡」

僕が拒むよりも早く、虹也さんの指が僕の胸元に伸びてくる。身体を男性らしく見せるための補正インナーは、彼の慣れた手つきによって、カチリ、と小さな音を立てていとも簡単に外されてしまった。

「あ……っ」

解放された胸が、ふわり、と小さく揺れる。男性の僕にあるはずのない、柔らかな膨らみ。それが、透けるようなシルクのシャツ越しに露わになり、乳首の先端が少し硬くなるのが自分でもわかった。